

調査研究プロジェクト実績報告書【A 基幹研究】

1. 研究種別：A 基幹研究
2. 研究期間：2021 年 10 月 ～ 2024 年 3 月
3. 課題番号：2021A01
4. 研究テーマ名：研究 II-1 『民族共生を実現する新しい博物館教育の研究』
5. 調査研究課題名：博物館利用者ならびに、国立アイヌ民族博物館基本展示の展示観覧行動と展示評価に関する研究
6. 研究代表者（氏名、職名）：笹木一義（研究主査）
7. 研究メンバー（氏名、所属機関、職名）：奥山英登（国立アイヌ民族博物館、研究主査）、
シンウォンジ（同、研究員）、三木暁了（同、エデュケーター）
8. 研究協力者（氏名、所属機関、職名）：佐藤優香（東京大学大学院情報学環、客員研究員）
9. 交付決定額
令和 3 年度： 1,266,000 円
令和 4 年度： 1,512,000 円
令和 5 年度： 842,000 円

研究成果の概要（200 字）

2020 年 7 月開館の国立アイヌ民族博物館において、先住民族であるアイヌ民族の歴史・文化・現在を扱う国立博物館の来館者の基盤データをゼロから蓄積した。また、同館基本展示室の展示体験の調査を定量・定性の両手法から分析を試み、基本展示室の現状の課題点ならびに複数ある利用者像と利用者が求めるものとのギャップを明らかにした。それらの分析をもとに展示改修への改善を提案し、また教育プログラムの企画に活用した。

研究成果の学術的意義・社会的意義（200 字）

本研究の学術的意義は、先住民族とその文化を主題とする日本初の国立博物館における、来館者の基本属性と利用者像、博物館体験像を提示した点にある。加えて、先住民族と和人、ほか様々な民族を内包する現代日本における、博物館利用者調査を行う際の課題をも提示した。また、当研究の社会的意義は、当調査と分析から見える課題に対する思考が、博物館を通じた多文化共生のアクションの実現への課題解決や思考に寄与する点にある。

研究分野・専門分野： 博物館学、来館者研究、博物館教育

キーワード：

来館者調査／展示評価／博物館教育／アイヌ文化／多文化共生／ミュージアム・リテラシー

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

- ・博物館における来館者の行動研究は、アメリカでは1928年には行われており、1960年代から1980年代にかけて欧米で体系化された。日本では1997からの江戸東京博物館の改修のための大規模な展示評価調査と、2000年の琵琶湖博物館・2001年の江戸東京博物館での展示評価のシンポジウムとワークショップの開催が契機と言われる。一方で、来館者研究や展示評価の重要性は理解しつつも、相応の労力とスキルが求められるため、2010年代でも継続的に展示評価を実施できている施設は少ない現状である。
- ・利用者調査で得られる基礎情報は、各博物館の来館者の属性、行動内容の把握、来館動機、求めている体験内容、認知経路、再来館意向、実際に来館しての感想や意見などの情報を含んでいる。それは館の展示の効果検証のためだけではなく、館の運営のあり方、館のミッションの伝達具合、館が想定している活動と実際に来館者に伝わっているメッセージの合致（もしくは齟齬）の度合い、まだ来館していない層やリピーター獲得のための方針検討など、館の様々な活動の判断基準となる。そのためは、「博物館来館者の属性についての、継続的な調査、情報収集、現況把握、整理、館内共有の基盤整備」が必要である。
- ・また、博物館の常設展示は「一度作ってしまっただけで終わり」ではなく、常にそのミッションやメッセージがどの程度伝わっているのかを検証しなければならない。そのため、「実際に各展示がどのぐらい閲覧・体験されているか」、「体験された際に、どれぐらいねらいやメッセージが伝わっているか」、「博物館や民族共生象徴空間に来て、来館者が何をもち帰ったか(take home message)」について、来館者を対象にして調査し、その結果をもとに展示評価を行い、改善・改良していくことが必須である。
- ・利用者調査、展示評価については、予算が豊富であれば外注することは可能だが、それでは継続性を担保することができない。一定の範囲まで、館内の自前の人員、設備で継続的に調査実施ができる体制、インフラ、スキルの底上げが必要である。
- ・そのため、当博物館の基本展示室の設計方針・特性に則った、「来館者の展示体験状況を定量的に自前で調べることのできる手法の検証」と、「展示体験後の来館者から体験内容を取得する調査環境の検証・整備」を行い、来館者研究のインフラを整備し、基本展示の改善、改修に向けた実査と分析を開始し、基本展示の状況を把握するとともに、改善、改修のアクションに対する理論構築を行う必要がある。

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

2. 研究の目的

- ・本研究は、本館の基幹研究として、【研究 II-1】『民族共生を実現する新しい博物館教育の研究』の計画に則り、展示と教育活動を通じた民族共生の実現のため、利用者調査と展示評価を基盤とした研究を行うものである。
- ・本研究では、当館の来館者の属性について、継続的な調査、情報収集、現況把握、整理、館内共有を行うための基盤整備を行う。また、来館者の展示体験状況を定量的に自前で調べるための手法の検証と、展示体験後の来館者から体験内容を取得する調査環境の設計・検証・整備を行い、主に基本展示室での来館者への実査を開始し、その分析を開始する。
- ・当館は「アイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進する…」というミッションを持っており、それを遂行するために、どのような人々が来館者として来ており、どのような体験、理解をして帰宅していくか、という調査が不可欠である。来館者の基礎属性の把握とともに、その行動と理解度から基本展示室の展示のねらいがどこまで伝わっているかを評価し、基本展示の改善、改修に反映させることを目指す。また、展示ならびに展示室を使った教育活動にも活かすことを目指す。
- ・また、2015年3月の「民族共生の象徴となる空間」における博物館基本計画報告書（文化庁）の「5-10. 展示評価」（p.20）には、来館者に効果的な展示手法となっているかなど展示評価を積極的に行うことが示されている。
- ・来館者のデータがある程度蓄積できる見込みができた場合、プロジェクトの進行状況に応じて可能であれば非来館者調査も行い、非来館者に対してどのように館からアプローチすべきか、という中長期視点の検討の基盤となることも想定する。

3. 研究の方法

- ・利用者調査、展示評価の研究成果の近年 10 年ほどの範囲の文献を再度洗い出し、国内外含めた最新の研究動向、研究手法動向の情報収集も行う。
- ・利用者調査、展示評価の研究手法としては、社会調査の手法における「三角測量的方法 triangulation」が求められるため、定量的な分析（来館者属性、人数、行動のカウント等）と、定性的な分析（展示の体験内容の回答を分析する）の手法を用いる。双方を組み合わせることで、より実情に近いデータを取得、分析を行うことができる。
- ・特に展示評価の調査方法としては、観察法、質問紙法、面接法などがあり、適切な方法を組み合わせて調査設計を行う。紙と鉛筆、ヒアリングの古典的な調査方法も使用しつつ、オンラインアンケート、画像分析等、技術動向を把握し、コスト・ベネフィットを検証しつつ積極的に利用して、調査効率を高めて持続可能性が上がる方法論を目指す。
 - [観察法]：スタッフによる目視観察・記録、動線のトレース、定点カメラ等による動線分析
 - [質問紙法]：展示体験直後のアンケート調査（マークシート質問紙、タブレット端末、オンラインアンケート等）
 - [面接法]：来館者、展示体験者へのインタビュー調査
- ・個人が特定できるような情報を取得しないかたちで調査を進めるが、調査のデータ取得の時点から、調査の実施、取得したデータの使用方法などを来館者に掲示したうえで調査を行うよう、研究倫理の遵守を行いながら利用者調査を行う。
- ・新型コロナ感染対策等の影響の時期と当研究の時期が重なったため、接触や対面調査に対して障壁が出来ている状況下で、それらに対する対応を検討しながら調査を行う。研究期間中に発信された「新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症への移行に伴う博物館における感染予防の基本的方針」（日本博物館協会、2023 年 5 月 8 日）にも基づいて実施した。また、新型コロナ感染対策等で一部運用制限があった展示も含め、開館直後から数年にかけて展示の運用状況の変更があったため留意して調査・分析を行った。
- ・外部の研究プロジェクトとの協働として、科研 21K00999（基盤 C）「アイヌ文化の何をどう学ぶかー多文化共生のための博物館活用文化学習のデザインと評価」（研究代表：佐藤優香氏）との相互協力を行った。既存事例の分析、展示室での調査と分析の部分の協働を行うとともに、「展示の伝達度」「学習のデザイン」「学習の評価」について相互の知見を交換して各研究に寄与する。

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

4. 研究成果

2021年度から約3年の本基幹研究は、研究方法として下記「3つ+1つ」の軸を設定して実施した。

[A 利用者調査：当館来館者の基本属性の取得と整理、継続的な調査・集計・分析]

[B 実査・評価：基本展示室内での行動調査と、体験状況の定量・定性分析を通じた展示評価]

[C 分析・提案：利用者調査、展示評価に基づく展示を用いた活動の改善・改修に向けた分析・提案]

[D 非来館者研究：まだ来館していない人々への調査と分析、非来館者へのアプローチ検討]

（[D 非来館者研究]については、本調査研究プロジェクトでは実施することができなかつたため、後継の研究として、未来館者と再来館者の調査分析を行う調査研究プロジェクトを申請中である。）

[A 利用者調査] → リサーチ、設問設計、予備調査、利用者調査の項目精査、実査

- ・予備調査を行いながら設問設計を行い、来館者に向けた、調査用紙、キオスク端末によるアンケートを、特別展示・テーマ展示開催時に通年で行った。途中博物館予約システム上での実来場者数取得ができなくなったが、15展示分4,833件のデータを取得し、来館者属性、認知経路、再来館意向等の基盤データを得た。[2025年2月までの数値]
- ・予備調査の内容と、調査データの実際の回答状況を確認しながら、外部のコンサルティング内容もふまえ、設問設定の改善方法を検討した。

[B 実査・評価] → 手法選定、予備調査、実査によるデータ取得、展示評価手法・評価軸の検証

- ・展示企画室と相互に協力し、基本展示室の展示のアクセシビリティについてのアンケート調査を実施し2,541件の回答データを取得した [2025年2月までの数値]。
- ・外部講師（博物館のコンサルティングの専門家）とのコンサルティングを行い、調査状況、回答データ内容へのコメント、アドバイスを受けた。当館の設置環境や、展示企画室のハード面、ソフト面での環境の制約と、それに伴う調査方法の適不適の議論も行った。
- ・そのうえで、優先事項として、各展示テーマの個別のメッセージ伝達度よりも、展示全体のアクセシビリティ、ならびに展示全体を体験した際のメッセージ伝達度、ミッション達成に関する意識変容の達成度、を優先して調査、分析する方針として対応した。アンケート調査だけでなく、展示室の動線調査、対面ヒアリングも実施したが、当館の展示室の物理的、構成的な環境要因で調査が困難な要素も見出された。
- ・不足するデータ（特にヒアリング）があることを認識しつつも、展示室環境の変化が連なり適切なデータ取得が望めず、2023年冬季のナイトミュージアム以降は追加ヒアリングを断念した。
- ・当館のミッション、民族共生象徴空間の役割を鑑みた際に、「大多数の和人」だけでなく、アイヌ民族を含めた様々な国・地域の様々な文化圏の様々な民族の来館が想定されるはずであるが、それを調べる調査は未だ行われていない。当研究から設問項目として「任意で、国籍(nationality)と民族アイデンティティ(ethnic identity)をセットで尋ねる」ことを提案したが、実施に至っていない。

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

[C 分析・提案] → 展示評価のデータの分析、改善点の議論、館内へのデータ・分析の提示

- ・ 取得した調査データの内容確認、データ精査を行うとともに、調査環境の変化状況、設問にかかるバイアス、ヒアリングの回答結果との比較を行い、調査項目ごとの方法の適不適を検証した。
- ・ 調査に加わった研究協力者とともに回答内容をもとに議論を行い、分析軸の仮説として、来館者像の検討と、「当館におけるミュージアム・リテラシー」の検討を行い、学会発表を行った。
- ・ 展示企画室や文化庁等からデータ提供依頼があった際に、補足コメントを附してデータ共有を行い、基本展示の部分改修計画の立案の材料となった。

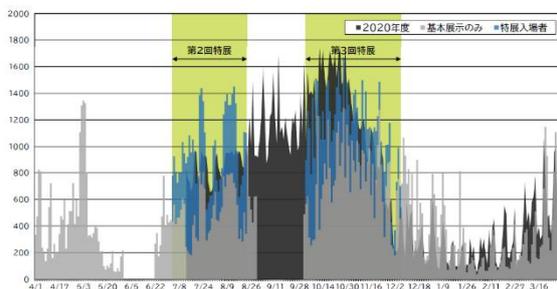


図1：日別来館者および特展来場者数推移例

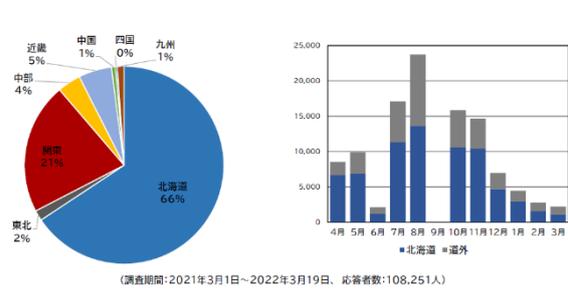


図2：予約枚数の地域別割合、道内外予約枚数例



図3：基本展示室の出口でのヒアリングの様子

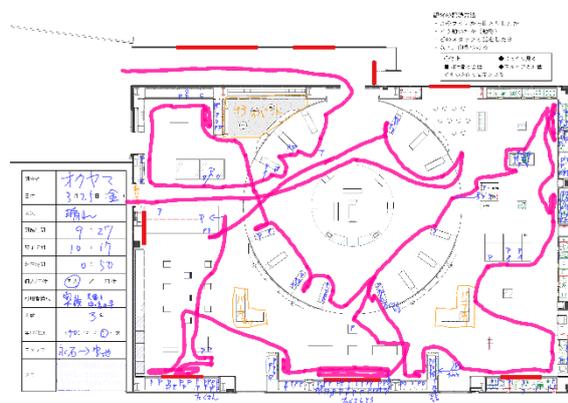


図4：基本展示室の動線調査の分析事例

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

5. 研究成果の発信

- ・来館者調査、展示評価の調査について、館内の各種事業の要望に応じて、調査データと概況の分析コメントをつけたかたちで、提供・説明を行い、各事業や展示室の部分改修の検討に活用された。
 - 広報委員会への調査データ提供（2022年4月）
 - 特別展、テーマ展の事業報告書へのアンケートデータ提供（2023年12月、2024年1月）
 - 展示検討ワーキング委員会への調査データ・分析の提示（2024年2月）
 - 誘客3カ年計画推進会議への調査データ・分析の提示（2024年4月）

- ・自由回答項目の回答をもとに、定量的・定性的の両方の方法から分析を試み、来館前後の意識変容・行動変容分析の試行や、当館の来館者像と展示メッセージ伝達の分析の試行を行い、全日本博物館学会で発表を行った（2023年7月、2024年6月）

- ・当館の展示や教育プログラムについて、本調査で得た調査データや分析軸を活用して内容検討、実施、分析、学会発表等を行った。
 - 「探究展示 テンパテンパ」の運用、関連プログラム、ワークシート開発、新規ユニット企画
 - 館内教育プログラムの企画、実施への反映：「展示を見る前のアイヌ博ガイド「イコロ トウンブをまわろう！」」（2022年4月から継続／ICOM CECA Athens 2024 で発表、2024年11月）
 - シンポジウム「ミュージアムの定義のリニューアルの流れと、国立アイヌ民族博物館の理念と活動」（日本ミュージアム・マネジメント学会、2023年6月）

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

6. 主な論文発表・成果物等

〔雑誌論文〕

- ・ SASAKI, Kazuyoshi; OKUYAMA, Hideto; OSHINO, Akemi and SATO, Yuka, “Developing and implementing the colouring worksheet for learning about Ainu garments (coats) and Ainu patterns by the National Ainu Museum”, in Margarita Laraignée ed., *Best Practice 11: A tool to improve museum education internationally*, ICOM CECA (International Councils of Museums International Committee for Education and Cultural Action), pp64-73, 2023, 査読有り、電子のみ
<https://ceca.mini.icom.museum/publications/best-practice/>

〔学会発表〕

- ・ SASAKI, Kazuyoshi, The development of the guided tour at the permanent exhibition of the National Ainu Museum as a catalyst for discussion on multi ethnicity, Market of ideas, ICOM CECA (International Councils of Museums International Committee for Education and Cultural Action) Conference, Athens, Greece, November 20 2024
- ・ 笹木一義、奥山英登、シン・ウォンジ、三木 暁了、佐藤 優香、「博物館来館者の、来館者像と展示メッセージ伝達の分析の試行：国立アイヌ民族博物館の来館者アンケートの自由回答分析より」、全日本博物館学会第 50 回研究大会、2024 年 6 月 30 日、北海道開拓の村
- ・ 笹木一義、奥山英登、シン・ウォンジ、「博物館来館者の、来館前後の意識変容・行動変容分析の試行：国立アイヌ民族博物館の来館者アンケートの回答分析試行より」、全日本博物館学会第 49 回研究大会、2023 年 7 月 2 日、國學院大學
- ・ 笹木一義、「ミュージアムの定義のリニューアルの流れと、国立アイヌ民族博物館の理念と活動」、日本ミュージアム・マネジメント学会第 28 回大会シンポジウム「ミュージアムの定義のリニューアルから見る、これからのミュージアムの役割」JMMA、シンポジウム登壇者、日本ミュージアム・マネジメント学会第 28 回大会、2023 年 6 月 3 日、乃村工藝社本社ビル、招待登壇
- ・ SASAKI, Kazuyoshi; OKUYAMA, Hideto; OSHINO, Akemi and SATO, Yuka, How to interpret and have a dialogue with visitors of the National Ainu Museum in order to bridge gaps in knowledge concerning indigenous people and culture, Market of ideas, ICOM CECA (International Councils of Museums International Committee for Education and Cultural Action) Conference, Prague, Czech Republic, August 23 2022, hybrid
- ・ 奥山英登、笹木一義、押野朱美、カサド・パルド・ケラール、今野彩、シン ウォンジ、永石理恵、長谷仁美、両角佑子、佐藤優香、「体験型展示「探究展示 テンパテンパ」における、コロナ禍での運用の工夫とその評価」、全日本博物館学会第 48 回研究大会、2022 年 6 月 26 日、國學院大學
- ・ 笹木一義、奥山英登、押野朱美、佐藤優香、「国立アイヌ民族博物館の教育普及ツール開発 — 着物のぬりえワークシートを事例として」、全日本博物館学会第 48 回研究大会、2022 年 6 月 25

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

日-26日、國學院大學

- ・奥山英登、笹木一義、押野朱美、カサド・パルド・ケラール、今野彩、シン ウォンジ、永石理恵、長谷仁美、両角佑子、佐藤優香、「アイヌ民族の文化と歴史の多様さを感じさせる体験ユニットの開発 — 国立アイヌ民族博物館探究展示テンバテンパの事例から (2)」、全日本博物館学会第 47 回研究大会、2021 年 6 月 26 日、高知みらい科学館、ハイブリッド開催

〔図書〕

- ・笹木一義、「国立アイヌ民族博物館の展示室で見えてくる、最前線の教育普及活動の課題」、国立アイヌ民族博物館（編）、『ウアイヌコロ コタン アカラ ウポボイのことばと歴史』、国書刊行会、pp.180-200、2023 年

〔寄稿・解説〕

- ・笹木一義、「博物館の教育活動：着物のぬりえワークシート」、国立アイヌ民族博物館ニュースレター「アヌアヌ」、Vol. 12、国立アイヌ民族博物館、p6、2023 年
- ・笹木一義、「調査研究最前線 2: Report 1 博物館体験を深めるための教育コンテンツ開発の研究」、国立アイヌ民族博物館ニュースレター「アヌアヌ」、Vol. 8、国立アイヌ民族博物館、p6、2022 年

〔その他〕

- ・館内の展示企画室へ、分析途中データの提供、説明を実施（展示検討 WG 委員会、3 カ年計画推進会議等）
- ・当館教育プログラムへの研究内容の反映「展示を見る前のアイヌ博ガイド「イコロ トゥンプをまわろう！」」、国立アイヌ民族博物館、2022 年から継続中

以上